電卓のあった風景　ＥＬ－５００２，Ｆｘ－３６００Ｐ
・・　そして、アラ還エンジニアの回想　・・

私が初めて関数電卓を購入したのは、昭和５３年の夏頃、最初の会社に入り、設計室に配属されて、すぐの事。成田空港管制塔襲撃事件のあった、あの年である。
入ったばかりの新人に、机とドラフター（もちろんパンタ式）があてがわれ、
「お前には、こんなのは、勿体ないんだが。」
と言わんばかりに、中古の電卓を渡された。その性能には全く不満は無かったのものの、面白くない事、この上無い。
これを解消するには、自分で選んで自前で買うしか無い。これなら、文句あるまい。

専門店、店頭のカタログを開けば、関数、メモリー、カッコ機能、プログラム機能、最新技術が満載。８ビットパソコン時代突入寸前の、電卓技術百花繚乱の頃であった。
その中で気に入ったのが、シャープのＥＬ－５００２である。最高機種ではなかったが、「最適を以て、最高とする。」私の物差しにおいて、最高であった。
具体的に言えば、関数機能５０種、定数メモリー６本、積算メモリー１本、カッコ機能に加えて、３９ステップの数式記憶機能があり、データを入れ替えしながら、同じ計算をイヤというほど繰り返す技術計算に、この低価格で、これほど適した機種はなかった。
その日が来た。当時の定価は、１０８００円。部屋中のご老体連中、注視の中、これ見よがしに万札を取り出し、出入りの文房具屋から２割引きで購入したのである。
「駆け出しの若造が、生意気に分不相応な買い物しやがって。」
と、口には出さぬ、某ご老体、約１名。あの時の「仏頂面、ニガ虫目線。」は、今思い出しても、痛快極まりない。

無論、短所もあった。まず、電力消費の大きい事。単３ｘ２本で、１日持たないのである。社内ではＡＣアダプタで使用したが、日帰り出張で電池切れになった事もあった。
２番目は、メモリーとプログラムが保持されない事。今ならメモリー保持なんか常識であるが、当時はその一歩手前であり、承知して我慢して使う時代だったのだ。
ＥＬは、よく働いてくれた。数年間、私の頭脳の一部であったと言って過言ではない。
あの、緑色の美しい、頼もしい蛍光表示が、突然チラつきを見せた時、私がどれほどの不安を覚えたか、ご理解頂けるだろうか。これはグズグズしてはいられない。

当然、２台目はこの短所をカバーした機種を選定する事となった。すでに８ビットＰＣ時代は始まっていた。私も、最新鋭機種、ＦＭ－８を使用していたが、まだまだポケット電卓の座を、揺るがすものではなかった。

液晶表示による低電力化、リチウム電池によるメモリー保持、全体の小型軽量化。その他の条件は前と変わらない、・・と言うよりも、基本的にＥＬに不満は無く、余計な機能が増える事によって、使い勝手が変わる事の方が、イヤだったのである。
重ねて言うが、私はＥＬが大好きであった。ステップ数が少ない点は、数式を簡略化して、定数を入力する際は、メモリーを有効に使う事で凌ぐ。その他、各種のヒネリ技。
これらを私に叩き込んでくれたのが、ＥＬだった。その事は、私が８ビットＰＣ時代に、ＢＡＳＩＣプログラムを、何の抵抗も無く吸収出来た、最大の要因と考えている。
シャープの技術陣には、誠に感謝に堪えない。

話が逸れたが、それならば２台目も当然ＥＬシリーズから選定した、と人は思うであろうか。否、それはカシオのＦｘ－３６００Ｐ、昭和６０年の事であった。
目的も不満も、書き尽くしているので、もう説明する事は何も無い。
ただ明記しておきたいのは、メーカーが違っても、その基本スペック、路線は全く同一で

あり、それが私の使用目的に見事に合致していた、と言う事である。
　ＥＬは上記のとうり、賞味期限限界と思われるため、厳重保管状態にある。
　Ｆｘの方は、現役バリバリであるが、それでいて、すでに博物館レベルである。とすれば、これもいずれは代替を考えておくか・・、いや、すぐにも代替を用意すべき時期なのかも知れない。
　またしても、ＥＬ対Ｆｘの壮絶な一騎打ちが始まるのか。曰く、歴史は繰り返す。
　ともあれ、「動いているうちに、欲しい。」者がいるならば、早く言うが良い。無論、取り説もある。

　今日ネット上で検索してみると、両者ともかつての名機種として、絶賛とまでは行かずとも、かなりの高（好）評価を受け、大事にされている事が良くわかる。
「骨董品、ＥＬ－５００２、持ってます。完動、非売品です。」
なんて豪語する、マニアコレクターが、（他にも）実在するのだから。
　上記マニア達のビョーキは、死ななければ治らないであろう。

　駆け出しの若造も、某ご老体の年齢に近づきつつある。この３０余年を、たった２台の電卓で過ごして来たとは、かなり感慨深い事である。ＰＣの普及が、電卓の進化、突然変位を強要しなくなった事は言えるだろう。それにしても、両社の先見性と、競争は素晴らしいものであった。あえて、付け加えるならば、
「昔の機械は頑丈で、長持ちして、そして修理が利いたもんだよ。」

　今日、電卓にとって替わる物は、ケータイかスマホか。それ自体の中に能力を持っていなくても（いないクセに）、素早く問い合わせる事が出来れば、それで凄い能力があるかのように見えてしまうのである。
　何でもかんでも人に尋ねて済ませ、自分では何も調べようとしない、寄っ掛かり人間が結構いるが、それと変わらない。ケータイは便利か知れないが、ケータイ無しでは、何も出来ない人間になってしまってはお終いである。
　そんな人種は、ケータイの画面だけを見て、その背後にある恐ろしい仕掛け、人間の知識、意欲、財産を吸い取り、魂をも吸い取るワナが見えておらず、隣の人間も足元も見えずに、電車とホームの間に落ちてしまうのだ。
　えい、また話が逸れた。

　今でも、川崎の某工場で動いているコンベアは、３５年前、私とＥＬで設計したものである。無論、「私一人で・・・」、などとは言いはしないが、当時の私の全力を込めて造った装置であり、各所の寸法、角度は、いまだに私の脳裏にある。そして、それはＥＬの助力無しには、成し得なかった。
　当時と勤め先は変わったものの、不思議なご縁で、出入りは続いている。他の用件でも、その工場へ行けば、必ず装置を見るし、もし若い連れでもいれば、必ず自慢する。そして、ＥＬを思い出し、もう一つ思い出す。
「俺は、アイツを手本には、しなかった。」

　１０余年の現役中、ＥＬは私の傾斜した製図板の右上が定位置であった。よく落とさなかったものだと思うが、ＡＣ電源の電線を、まさに命綱の様にして置かれていたのだ。
　そして、赤いクリアキーの、白い文字”Ｃ”と、背中にあったコメ粒大のイボが、完全にスリ減るまで酷使したのである。
　写真を撮った記憶もあるのだが、あれは何処へやったか。ドラフターとコンパス、三角定規の向こうに、当然電卓も入れたであろうに・・、あれは何時の事であったか。
　あの風景は今でも時々思い出す。

（Ｈ２５，８－２９　西村　忍）